

## ねがいのいえニュース 第54号

生活支援ハウスねがいのいえ広報紙・2019年7月15日発行

発行責任者：藤本真二 〒331-0071 さいたま市西区高木185-29

Tel (048) 626-1909 Fax (048) 626-1920

E-mail negainoie@r6.dion.ne.jp Hp <http://www.negainoie.com>



久しぶりの通信になりましたが、みなさまお元気ですか？ねがいのいえは長年の念願がかない、最重度対応のグループホーム「しあわせそう」がようやく完成しました。多忙さもスケールアップし、新人も一気に増えて、16年目にして重要な転換期を迎えていると感じております。

### 「しあわせそう」の日々

ご自宅での暮らしが大変なみなさまに長い間お待ちいただきましたが、この春、グループホーム「しあわせそう」がようやくスタートし、スタッフもここが集合の拠点になりました。入居者のみなさまは、これまでにショートステイを定期で利用して宿泊の練習を十分に積んでいられています。

強度行動障害のりさんは、これまでに数回、一晩中暴れる行動が止まらない日がありましたが、移転の心配をよそに、今は誰よりも早く布団に入り、静かに過ごされています。

脳性麻痺ののりえさんはショートステイを始めた頃、一晩中泣き続けていました。日中は穏やかに笑う姿しか見たことがなく、なぜ夜になると人が変わったように泣き続けるのか理由がわかりませんでした。学んだセラピーを駆使し様々な方法を試した結果、1年後に眠るようになりました。

そのような助走期間を経てスムーズに入居へ移行すれば、難しいと言われている人も問題なくホームでの暮らしを実現することができます。

全スタッフが集まる拠点にもなっているしあわせそうの夜は、泊りのスタッフと、一日の勤務を終えて帰宅するスタッフが、利用者のみなさまと一緒に過ごす団らんの時間にもなります。果物やアイスクリームなどを口にしながら楽しそうに語る様子は、人として当たり前な生活がここにあると感じられます。

利用者のみなさまと約束した50人のホーム実現のために、次へ続くモデルとなるよう願いながら、多くの人に見学がてら遊びに来ていただき、願わくば、みなさまを支える仲間に加わっていただけたら幸いです。



### しあわせそうスタッフ 引き続き募集中です。

毎晩2人体制でケアに当たっているしあわせそうスタッフですが、まだ毎日の宿泊スタッフが充

足していません。経験のない方も、現在の職場で理想とするケアを実現できずに悩んでいる方も、ねがいのいえの研修を受けながら、心のケアで癒す方法を学び一緒に働きませんか？

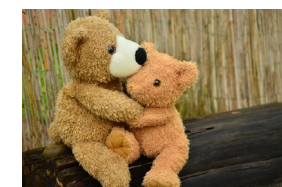
### さいたま市議団ニュースより

新聞と一緒に届けられる日本共産党のさいたま市議団ニュースが、入所待機者の問題を取り上げていました。さいたま市の入所待機者は300人を超えますが、重度の障害のある方の場合、グループホームではなく、職員配置の厚い入所施設を求める要望が強いと書かれています。その要望を受けて、グループホームも入所施設も必要な数を整備すべきと訴えていました。

しかし、本当に入所施設は職員配置が厚いと言えるでしょうか？確かに職員の数には圧倒的に多いと言えます。しかし入所者の数も多いのは誰もが知るところです。1人の職員がケアする利用者の数は何人になるのでしょうか？まして夜間となれば、その数は何十人にもなります。

そのような環境の中で、気持ちを聞いてもらえず、十分に寄り添ってもらえない利用者の方たちが、パニックを起こし、強度行動障害と呼ばれる人になっていく様子は、この上なく悲しい姿です。

私たちがなぜ入所施設ではなくグループホームを目指しているかと言えば、ひとりひとりから求められた時に、十分に寄り添える環境を保障したいからであり、気持ちに寄り添えれば、行動障害の重度化や困難化はゼロに近づけることができるのだと確信しています。



さらに言えば、グループホームが最高の環境ではないことも理解しています。しかし現行の制度下では、実行できる現実の中のベスト、と言えます。将来、新しい形が生まれれば制度もあとからついてくることでしょう。

重度な人は地域では暮らせないと公言する「専門家」の言葉に惑わされることなく、どんな人も地域で暮らせる街を、一緒に目指しましょう。

### 「行動障害が穏やかになる心のケア」重版へ

2016年末に出版した理事長の著書が、およそ2年を経て初版を売り切り重版となりました。同じように悩める施設職員や当事者家族のご支持を得た結果だと認識しております。おかげさまで、本を読んだという方が遠方より泊りがけで見学や研修に来られることが多くなってきました。

そんなみなさまから一様にお聴きするのが、「国の行動障害研修だけでは解決しない」という言葉です。私たちも受講しましたが、日常の生活場面で起きる問題の中の一部には確かに有効であると理解しました。しかしその方法だけで、その方の人生に起こる問題が全て解決できるものではないと感じています。

ある研修会では、TEECHの手法を解説する講師へ、

「起きている問題の背景に虐待などが原因としてあったらどうしますか？」と質問すると、

「それはその問題を解決する必要があります」と答えられていました。

だとすれば、問題の全てをTEECHで解決することはできないということを講師自身が認めたこと

になります。しかし家庭の中で起きている問題は、他人が介入することが出来ず、解決できないことが多いのが現実で、その解決できない問題をどのように乗り越えるのかが課題です。また、予定や環境にこだわる自閉特有の課題よりも、そのような解決できない心の問題のほうが実際には多いことを、多くの現場職員が知っています。

その解決できない問題をどう乗り越えて生きていくか、本人のレジリエンスを育てる方法こそが求められているのではないのでしょうか？そして構造化を手法の中心にしている行動障害研修の中にはその答えがないことを、多くの人が感じています。現場で悩む職員は、その答えを求めているのではないのでしょうか？

同じ想いを抱いた多くの方たちが、私たちの研修に集まって来られます。ある受講生は、「最重度の行動障害の方は街の中のグループホームで暮らすのは不可能だと先輩から言われた」と語られ、私たちの取り組みに高い関心を寄せていました。

願わくば、国の方針をリードするみなさまに、障害のある人や心病める人を癒し支える方法は、世界中に様々あることを認識していただきたい。そしてその方法の中のひとつとして「心のケア」は、多くの方から「求める方法はここにあった」と評価されていることをわかっていただきたいと思います。



## 出会った人に寄り添えるのか

現場の介護職員でしかなかった理事長がねがいのいえを開いてから16年経ちます。現場出身の多くの福祉起業家と同様、経営は専門外の仕事で、経営者としてはまだまだ未熟です。しかし21世紀は、障害福祉の未経験者でありながら経営者として優れた人材が参入し、目ざましいスピードで成長する団体が全国に現れています。

ひとつ懸念するのは、成長が急速で、利用者を数百人も抱えていく団体の姿に、私たちの掲げる理念である、「出会った人の生涯を支える」という考えはあるだろうか、という点です。ねがいのいえは、出会った人が家庭の状況に応じて、何才になった時に、どの方と一緒にいたら暮らせるかなどの課題を、利用者のみなさまが幼児だった時からずっと考え続けていました。

今から7年後までに50人のホームを用意すると約束していますが、15年のプロセスを経て実現に取りかかったところです。それは短期間でできることではなく、長い年月をかけて周到な準備を積み上げていかなければなりません。その準備は、短期間で多くの利用者を抱え過ぎたら不可能ではないかと感じます。

世の中の全てを救えるとは思っていない、しかし、「出会った人の生活を24時間支える」「出会った人の生涯を支える」と決めているだけです。それを全ての事業者に実行していただければ、この社会に存在する全ての問題は解決する。そう思っています。

多くの事業者が、起業するその時から、出会う人の生活の全てとその生涯に寄り添うことを意識していただきたいと、願ってやみません。

## 存在の大切さ

動物には関心がなく、ペットには縁のない自分だったが、動物好きの家族が4年前、生後1ヶ月の猫を保護し、スポイトで薬とミルクを飲ませ命を救った。その命の恩人にはなつこうとせず、いつも自分のほうにばかり寄ってきて家族を悔しがらせる子だった。

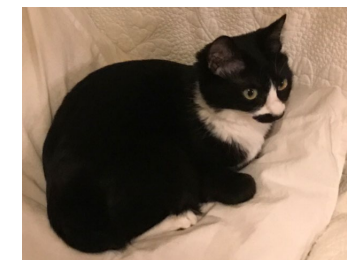
ドアの隙間や高いところからいつもこちらを見ていて、自分が立ちあがって歩き出すと駆け寄って来て、小さな体をぶつけるように足元にまとわりついた。朝は顔を舐められて目が覚め、半身を起こした自分の膝の上でピョンピョン跳びまわる毎日だった。

一切の世話をしたことがない自分に対して、まるで見返りを求めない無償の愛を注いでくれているかのようだった。

その彼女が半年前の明け方、絶叫とともに苦しみ出した。病院の空いていない時間帯、抱っこしたまま病院の前でドアが開くのを待った。薬でいったん眠ったが、お昼に再び発作を起こして心臓が止まり、医師の心臓マッサージのかいもなく、そのまま息を引き取った。

まだ温かさの残る体を抱きながら泣き続けた。夜は暖房をかけない冷たい部屋で一緒に眠った。朝、舐めに来てくれない体を愛撫し続けた。

ペット霊園で手厚い葬儀をしていただき、お骨は自宅の仏壇に置いて毎日手を合わせる。かわいらしい声は今も耳に残り、温かい感触は体が覚えている。今も思い起こしては涙にくれるが、いつまでも忘れたくない。あえてその悲しみの中にいたい。いつまでも覚えていたい。



障害のある人に関わる私たちの心には、2年前のやまゆり事件が今もトラウマとして刻まれている。そして、「生産性のない障害者に税金を使っていいのか」と言い放った犯人と、その言葉にSNSを通じて賛同した多くの人々へ、何と説明したらよいのか日々さいなまれている。

しかし、そこに存在しているだけで救われる家族がいる。彼らに支えられる多くの人がいる。いなくなったら悲しくて悲しくて仕方がない。それこそが、「存在の大切さ」である。それでいいではないか。それで十分なのではないか。他に説明があるだろうか。

誰かにとって大切な存在を守るために協力し合う。それは、人間だから。その一言に尽きる。

## 認定NPO法人を目指して 重ねてご協力をお願い

今後事業が拡大していくにつれて、みなさまからご寄附をいただくこともあるかと思いますが、寄附して下さった方が少しでも税の優遇が受けられるよう、認定NPO法人を取得したいと思っています。3年前からお願いしておりますが、昨年度は、3千円の寄付を100人以上から受けるという条件をなんとか満たすことが出来ました。今年もこの条件を満たすことができれば、ようやく来年度に申請することが出来ます。ご協力いただけるかたは、同封の振込用紙を使って郵便局からお願いいたします。振込用紙のない方は以下の口座にお願いいたします。

郵便口座 藤本真二 00160-4-569771